

相談支援の質を高めるストレングスモデルの取り組み —N自立支援協議会におけるグループスーパービジョン—

Efforts of Strengths Model to Enhance the Quality of Social Work Practice

室 林 孝 嗣
MUROBAYASHI Takatsugu

近年、社会構造が大きく変化するなか、福祉対象範囲の拡大とともに、生活課題が複雑化、多様化、深刻化している。富山県では、これまで障害のある人に関わる相談支援従事者研修等を開催し、相談支援専門員の養成及び資質の向上に努めてきたが、こうした状況に対応できる相談支援専門員を育成していくためには、日々の実践の積み重ねとそれをスーパーバイズする機能が必要である。平成27年度から、ストレングスモデルに基づく研修会を開催してきたが、平成29年度は、富山県のN圏域における自立支援協議会の活動の一環として、「N自立支援協議会相談部会」グループスーパービジョン研修会を開催した。

キーワード： ストレングスモデル、GSV、相談支援専門員、人材育成

I. はじめに

「相談支援」が障害者自立支援法（2006（平成18）年4月施行）に位置づけられてから12年になる。障がい者制度改革推進本部等における検討を踏まえて障害保健福祉施策を見直すまでの間において、障害者等の地域生活を支援するための関係法律の整備に関する法律（以下「改正障害者自立支援法」）（2010（平成22）年）により、相談支援体制の強化として基幹相談支援センターや地域自立支援協議会が法定化され、同時に支給決定プロセスの見直しやサービス等利用計画作成の対象者の大幅な拡大が図られた。そして、2013（平成25）年4月からは障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律（以下「障害者総合支援法」）となり、障害のある人の相談支援のさらなる充実が望まれている。平成28年度以降、障害福祉サービスを利用する者のサービス等利用計画を作成することにより、本格的に制度運営されることになった。しかし、制度改革を進めている間にも社会は大きく変化し、生活問題は広範化・深刻化・多様化してきている。単にサービスを組み合わせて提供することで様々な生活課題が解決するわけではなく、対人援助の方法としての専門性の高いソーシャルワークが必要とされている。

富山県において、現在行われている相談支援従事者養成研修を通して相談支援従事者の質の向上を図るとともに、より実践的な取り組みができるようストレングスモデルをベースとした意思決定支援を基本相談支援に取り入れ、利用者との信頼関係を築いていくとともに、相談支援従事者にはグループスーパービジョンを取り入れ、より高度な援助方法を検討していく。

具体的には、富山県相談支援専門員協会の活動として、圏域における自立支援協議会及び基幹相談支援センターに於いて、ストレングスモデルを基本としたグループスーパービジョンを研修というかたちで実践する。その成果を基にさらに相談支援従事者現任研修の新しい研究カリキュラム（案）に組み込まれているグループスーパービジョンのプログラムが実施できるようその内容を検討することを目的とする。

II. ストレングスモデルの取り組み

2017（平成 29）年 5 月から 2018（平成 30）年 3 月までの間、「N 自立支援協議会相談部会」において、相談支援事業者並びに行政の職員を対象に、ストレングスモデルをもとにグループスーパービジョン研修会を実施した。

これは、N 自立支援協議会相談部会で定期開催されている勉強会において、平成 29 年度のプログラムとして参画したものである。本地域には基幹相談支援センターはまだ未設置であるが、センターの役割としての「地域の相談支援体制の強化の取り組み」である①相談支援事業者への専門的指導、②助言・相談支援事業者の人材育成、③相談機関との連携強化の取り組みとして、試行的に行われたものである。プログラムの内容は、【表 1】のとおりである。

第 1・2 回目は、「相談支援専門員のためのストレングスモデルに基づく障害者ケアマネジメントマニュアル（Basic Strengths Model Training Manual）」をテキストとして、講義を行った。その後は、毎回、1 相談支援事業所から 1 事例のストレングスアセスメント（SA）を提出してもらい、グループスーパービジョン（GSV）を行った。1 か月後にはその後の経過を報告した後、新たな事例でグループスーパービジョンを行うというスタイルをとった。

全部で 8 事業所・8 事例が提出され、それぞれグループスーパービジョンを行った。

【表 1】平成 29 年度「N 自立支援協議会相談部会」グループスーパービジョン研修会

	日時	内 容	会場	人数
1	5 月 30 日 13:30～17:00	ストレングスモデル講義（1）	K 市役所	16
2	6 月 6 日 13:00～17:00	ストレングスモデル講義（2）	K 市役所	16
3	6 月 27 日 15:00～17:00	事例①グループスーパービジョン	K 市役所	16
4	7 月 18 日 15:00～17:00	事例②グループスーパービジョン	K 市役所	16
5	8 月 22 日 15:00～17:00	事例③グループスーパービジョン	K 市役所	16

6	10月31日 15:00～17:00	事例④グループスーパービジョン	K市役所	16
7	12月20日 13:00～17:00	事例⑤グループスーパービジョン	K市役所	16
8	1月23日 15:00～17:00	事例⑥グループスーパービジョン	K市役所	16
9	2月20日 15:00～17:00	事例⑦グループスーパービジョン	K市役所	16
10	3月13日 15:00～17:00	事例⑧グループスーパービジョン	K市役所	16

<ストレングスモデル講義>

1. スtrenグスモデルの基本的な考え方

ストレングスモデルは、1980年代にカンザス大学で取り組まれたケアマネジメントの一つで、チャールズ・ラップらが提唱した理論である。

ストレングスモデルの基本的な考え方は、

- ① 障害や欠陥に焦点を当てるのではなく、人間的なつながりを構築していく過程で、ストレングスを理解することにある。
- ② スtrenグスモデルは、クライアント自身の設定する目標を中心に、地域での人間的なつながりを再構築する支援である。

以下、「相談支援専門員のためのストレングスモデルに基づく障害者ケアマネジメントマニュアル」¹⁾をもとに、ストレングスモデルを概観する。

ストレングスモデルでは、「どの時点においても、生活がうまくいっている人は、少なくとも一つの目標、それに関連した才能と次の段階に移る自信をもっている」として、「個人のストレングス」に「熱望」「能力」「自信」の3つを、また「生活がうまくいっている人は、資源と機会と意味ある関係への接近方法をもっている」として、「環境のストレングス」に「資源」「社会関係」「機会」の3つをあげている。

ストレングス理論は、人の生活の質や達成、生活に対する満足度の大部分は、その人が住む生活の場のタイプと質に帰せられると仮定し、その生活の場は、人の主な生活様式（居住環境、仕事、教育、娯楽、社会的関係）に近似していると考えられるとしている。すべての人にとってふさわしい場所の質は、その人の願望、能力、自信、環境の資源（人が利用できる機会や人々）の機能によって決定される。

(1) スtrenグスモデルの原理

まず、ストレングスモデルの基本的な考え方を理解するために、ストレングスモデルの原理を6つあげている。

<ストレングスモデルの原理>

- ① 障害のある人々はリカバリーし、生活を改善し高めることができる。
- ② 焦点は欠陥ではなく、個人のストレングスである。
- ③ 地域を資源のオアシスとしてとらえる。
- ④ クライアントこそが支援関係の監督者である。
- ⑤ ワーカーとクライアントの関係性が根本であり本質である。
- ⑥ 私たちの仕事の主要な場所は地域である。 (福井貞亮訳) 2)

2. 新しい生き方の再発見

ストレングスモデルでいう「リカバリー」とは、「人々が生活や仕事、学ぶこと、そして地域社会に参加できるようになる過程」のことをいい、小澤温は「リカバリー」を「新しい生き方の再発見」と訳した。「診断する側-される側」or「援助する側-される側」という一方向の関係性（医学・診断モデル）から解放され、自身のストレングスを認識し、地域での人間的な関係性を取り戻すことであるとしている。

パット・ディーガンは、リカバリーを次のように説明している。「リカバリーは、プロセスであり、生活の方法であり、態度であり、日々の挑戦すべきことに近づく方法です。それは、一連の完璧なプロセスではありません。時として、私たちの針路は不安定です。だから、私たちは、つまり、後ろにすべり、建て直しを図り、再出発するのです」

リカバリーは、病気があるからできないという見方ではなく、病気があっても意味のある人生を送るためにゴールを設定し、ゴールに向かっていく過程がリカバリーとなる。たとえ上手くいかない状況が続いても、本人が積極的に取り組んできたプロセスが成長につながる。ゴールに向かっていく中で、いろいろな場面で選択し自分で決めていくことになるが、その中で自分が何をしたいのか、自分にとって有意義なことは何かなど、自分自身を理解することにもなる。支援者が理解し、利用者の人生を定義するのではなく、本人自身が自分を理解し、やりたいことを見出していく。

そして、支援者が障害のある人と関わるうえで大切なこと（共感的な理解を生み出すには）として、5つあげている。³⁾

- ① 障害のある人が新しい生き方の再発見（リカバリー）ができると信じること。
- ② 障害のある人が生き方を自分で決めることができると信じること。
- ③ 障害のある人が生き方を自分で選択することができると思えること。
- ④ 障害のある人の新しい生き方の再発見（リカバリー）の歩みを尊重すること。
 - ・利用者の新しい人生の再発見を信じている態度を示す。
 - ・コミュニケーションと言葉（利用者が支援者の言葉をどのように受け止めているか）
- ⑤ 障害のある人が新しい生き方の再発見（リカバリー）をするプロセスは回り道をしながらしらずつ進む。

新しい生き方の再発見が意味するものとして、①人は、生活の主な決定を自分でコントロールすることを意味する。②人は、人生経験について理解し、その経験から役に立つものの見方を開発し、前進する力があることを意味する。③人は、人生について前向きな考え方をすることを意味する。④人は、自らの健康を促進するために、目的に合わせて段階を踏んでいくことを意味す

る。⑤人は、希望を持っており、人生を楽しむことができることを意味する。

また、新しい生き方の再発見が意味しないものとして、①新しい生き方の再発見は、その人が努力しなくてもよいことを意味しない。②その人が保健医療サービスを利用しないことを意味しない。③その人が薬物による治療を行わないことを意味しない。④その人がサービスを利用するすべての面で、完全に自力で決定することを意味しない。

(2) ストレングスの6領域および4つの側面

ストレングスには、大きく個人のストレングスと環境のストレングスがある。個人のストレングスには、熱望 (aspirations : 強い願望)、能力 (competencies : 過去に行ってきたことを含めた能力)、自信 (confidence : 目標に向かって段階的に進む) の3領域があり、環境のストレングスには、資源 (resources)、社会関係 (social relations)、機会 (opportunities) の3領域がある。これらの6領域は、相互に影響し合っており、特に熱望、能力、自信の相互作用が個人のストレングスの強化につながるとしている。

また、ストレングスの4つの側面とは、「性格・人柄／個人的特性」「才能・素質」「環境のストレングス」「興味・関心／向上心」をいい、ストレングスアセスメントを行う際にこれらの4つの側面で整理することで、利用者のストレングスを見出すうえで有用であるとしている。⁴⁾

【表2】 ストレングスの6領域

個人のストレングス (Individual Strengths)	環境のストレングス (Environmental Strengths)
熱望 (aspirations) (強い願望)	資源 (resources)
能力 (competencies) (過去行ってきたことを含めた能力)	社会関係 (social relations)
自信 (confidence) (目標に向かって段階的に進む)	機会 (opportunities)

【表3】 ストレングス整理表

性格・人柄／個人的特性 (例えば) 正直な人、おもしろい人、話好きな人など、様々なタイプ	才能・素質 得意なこと、人に誇れることなど (例えば) 楽器が得意、料理が上手など
環境のストレングス 利用者を取り巻く環境のなかにあるストレングスであり、その人のストレングスを強めるもの (例えば) 家族や友だち、仕事など	興味・関心／向上心 利用者が関心をもっていること、学びたいと思っていること (例えば) 大学を卒業したい、職業の訓練をしたい、家族をもちたいなど

2. ストレングスモデルにおける3つのツール

ラップらの研究チームは、ストレングスモデルを行うために、いくつかのツールを開発した。できるだけシンプルな様式で、個人や環境のストレングスを捉え、当事者自身が人生や生活目標を設定するために役立つツールとして「ストレングスアセスメント」を、またストレングスアセスメントで収集される本人や環境のストレングスを最大限に活用し、本人の設定する生活・人生目標を達成するための「パーソナルリカバリープラン」、さらに、それらのツールの使用の質を高め維持するための「グループスーパービジョン」を開発した。

(1) ストレングスアセスメント (Strengths Assessment : SA) ⁵⁾

ストレングスモデルは、個人と環境のストレングスを、クライアント自身の視点から記録するストレングスアセスメントの効果的な使用なくしては成立しない。

日本のケアマネジメントはクライアントの生活ニーズを導き出すことを主に生活課題を抽出しその解決を目指した生活目標を詳細にアセスメントすることが求められる。つまり「ニーズ中心型アプローチ」であるが、ストレングスモデルは、「ゴール中心型アプローチ」である。言うなれば、クライアントの生活・人生目標にまず焦点が当てられる。

【表4】ストレングスアセスメント票 (様式)

現在のストレングス 現在持っている私の今のストレングスは？ (例えば、才能、技術、個人的、環境的資源)	希望と願望 私の人生・生活に必要としているものは？	過去利用した資源—個人的社会的、環境的な資源 私が今までに利用してきたことがある資源とその時のストレングスは？
家庭／日常生活		
経済生活		
仕事／教育		
支援的な関係		
健康状態		
余暇／娯楽		
生きがい／大切にしている価値		
私の優先順位 (大事にしている事柄・ものの優先順位は) は		

1)	2)	3)	4)
私を知るための追加コメントや重要なこと：			
これは私たちが考えた私のストレングスであり、これから目標達成に向けて、新たな項目などを足しながら使っていきます。		私はあなたが目標達成に向けてストレングスアセスメント票を使うことを同意します。私はそのために何が必要なかを考えます。	
本人署名	日付	支援者（相談支援専門員）署名	日付

ストレングスアセスメント票の様式【表 4】は、まず、生活の7つの領域が横軸に設定され（①家庭・日常生活、②経済生活、③仕事・教育、④社会関係、⑤健康、⑥余暇・娯楽、⑦精神性・つながり）、それらの7つの生活領域について、①現在利用している、あるいは利用可能なストレングス、②本人の希望や願望、③過去に利用した個人や環境のストレングスを記入するための欄が設けられている。

【ストレングスアセスメント票の重要な構成要素】⁶⁾

<内容>

- ① 利用者にとって有意義で重要な文脈の中で書かれている。
- ② 利用者に希望を生じさせる。
- ③ 記述が綿密で、詳細で、具体的である。
- ④ 利用者の視点や言葉で書かれている。

<過程>

- ① 利用者のペースで展開される。
- ② 支援者と利用者との対話形式で実施される。
- ③ 可能な限り利用者にとって自然な雰囲気の中で行う。
- ④ 継続的な過程であり、定期的にあセスメントの情報は見直し更新される。

【ストレングスアセスメント票の多様な使い方】

ストレングスアセスメント票は、次のことをするツールとして使われる。

- ① 初期の関係づくりの一環として相手をよく知る。
- ② 支援関係を開始するための流れを作り出す。
- ③ 利用者が自分の新しい生き方の再発見への道程を心に描き、その道程に通じる。
- ④ 利用者のよい側面を強調する。
- ⑤ 目標を達成するために利用者個別の方法を開発する。
- ⑥ 利用者が何かを達成するたびに評価し、ほめる。
- ⑦ 利用者の人生の中では平凡でなにげなく見えるものでも、新しい生き方の再発見に役立つものであれば光を当てる。

(2) パーソナルリカバリープラン (Personal Recovery Plan : PRP)

パーソナルリカバリープラン【表 5】は、ストレングスアセスメントによって明らかにされたクライアントの目標を、さらに、詳細な形でもって、具体的で達成可能な段階の行動レベルまで

落とし込むために使われる。段階目標それぞれに、達成日程を設定し、本人がどの部分に関して責任を持って取り組むのか、また本人以外の支援者がどのようにサポートするのかを記入していく。

ストレングスアセスメントとリカバリープランは、車の両輪であり、この二つのツールが揃いストレングスモデルとなる。特にストレングスアセスメントが、本人や環境のストレングスを発見し、設定目標を達成する上での動機や希望を促進するものであるならば、パーソナルリカバリープランは、それらを実際の行動として実現していくための地図になるものである。

パーソナルリカバリープランの作成により、達成すべき段階とそのために誰が責任を持つのかという役割の明確化がなされる。そして一つひとつが達成されていく記録は、クライアントにとっても、ケアマネジャーにとっても、自信を積み重ねていくことにつながる。⁷⁾

<パーソナルリカバリープランについての概観>⁸⁾

- ・パーソナルリカバリープランとは、利用者の新しい生き方の再発見の目標についての記録である。利用者にとって重要で有意義であることを反映するもの。
- ・パーソナルリカバリープランは、新しい生き方の再発見の目標を、小さくかつ適度なステップにするためのものである。
- ・パーソナルリカバリープランでは、それぞれのステップにおいて、目標達成に関する責任者を決める。
- ・それぞれのステップは、達成されるように計画され、現実には達成されるよう具体的に示される。(可能な限り細分化されたステップ)
- ・パーソナルリカバリープランの目標への進捗度合いについて記録する。(コメントは、利用者の希望を喚起するもの、重要な学びなど)

【表5】パーソナルリカバリープラン (様式)

私の目標 (新しい生き方の再発見の各領域を達成するのに意味があり、重要な目標)				
なぜ、その目標が私にとって重要ですか				
今日何をしますか (達成するために、測ることのできる短期間のステップ)	誰が責任を負いますか (実行する人)	いつ達成しますか (達成期日)	実際の達成日	コメント
上記の目標リストは私の新しい生き方の再発見の各部分の達成に重要です。		この人にとって上記の目標リストは重要であることを認めます。いつでも私は喜んでこの目標にむかってこの人が進むことを手伝います。		

本人サイン	支援者（相談支援専門員）サイン

(3) グループスーパービジョン (Group Supervision : GSV)

一般的なスーパービジョンの機能には、機関管理、教育、そして、支援機能がある。これらのスーパービジョンは援助実践者の教育や情緒的支援での効果があることは知られている。しかしながら、スーパービジョンがクライアントの結果に与える影響については、その効果は定かではない。ストレングスモデルでは、以上の3つの機能とは異なるクライアントを中心としたグループスーパービジョンを提唱している。既存のスーパービジョンのほとんどは、明確な構造を持たずに実施されている。ストレングスモデルのスーパービジョンは、限られた時間のなかで、より効果的にクライアントの目標達成のための支援を目的とする。スーパービジョンとしてその構造が明確に規定されている。⁹⁾【表6】

【表6】 グループスーパービジョンの段階

ステップ1	ストレングスアセスメント票の提出
ステップ2	利用者のゴールは何か、私（事例提供者）がグループから特に必要としている助言（助け）は何かを伝える
ステップ3	現状は何か、すでに取り組んだことは何かを簡潔に説明する
ステップ4	ストレングスアセスメント票から明らかにされ、チームが検討に必要としている情報について明らかにする
ステップ5	ブレインストーミング（アイデアを出していく）
ステップ6	示されたことに基づいた私（担当の支援者）のプランは何かについて表明する

以上のステップごとにセッションを設けそれぞれ時間を設定し行われる。¹⁰⁾

「ストレングスモデルに基づく障害者ケアマネジメントマニュアル」2015には、【表8】「グループ・スーパービジョンの進め方」として、まとめられている。¹¹⁾

(4) ストレングスモデルのまとめ

菊本圭一は、「ストレングスモデルに基づいたケアマネジメントの実践」（2015.11.21 富山国際大学）の講義のなかで、ストレングスモデルの3つのツールを以下のようにまとめている。

- ① ストレングスアセスメント
 - ・当事者と環境のストレングスのみに着目したアセスメントシート
- ② グループスーパービジョン
 - ・出席者が並列の関係で行われるスーパービジョン

・当事者支援のアイデアを出すことと支援者支援のふたつの側面がある

*アメリカ カンザシティ大学「ストレングスモデル (チャールズ・ラップ著)」による実践を基本に、支援者が「楽」になるための、支援者支援と公的サービスに偏らない支援のあり方を探るための手法。

・「最も腕が立つストレングスモデルのCMでさえ、何一つうまくいかない状況に陥ることがある」

・個の力、技術、経験を土台にして、チーム力を向上させて対応するイメージ。(サッカーと同じ)

③ パーソナルリカバリープラン

・一週間に一度のペースでひとつの目標を作り実施していくプラン

【表7】 グループスーパービジョンの進め方

ステップ	事例報告者	グループメンバー	ファシリテーター	留意点
1 事前準備	・事例の概要とストレングスアセスメント票を用意(個人情報の書き方に配慮)		全体を通して、よい雰囲気づくりにつとめる。	・提出された事例の簡単な説明。
2 報告セッション(5分)	・事例の要点や解釈(見立て)・判断の理由を端的に説明する。 ・本人のゴールと自分がどのような助言を求めているかをグループに伝える。(より具体的に、複数可)	・事例報告の間は発言しない(黙って聴く)	・本人のゴール、事例報告者の求めている助言・困り感を整理し、グループで共有する。	
3 質問セッション(20分)	・グループメンバーからの質問に答える。 ・回答は端的にテンポよく(質問する側も同様)	・求められている助言に焦点を当てて(意図を持って)質問。・事例の要点、判断理由などの不明点について、簡潔に質問する。・本人と環境のストレングス双方に着目する。	・質問のうながし、質問や応答の意図の確認・深化、視点の変更などに留意する。	・質問、応答の内容はアセスメント票に書き込む。ストレングスの記述に着目。
4 アイデアセッション(25分)	・このセッションでは発言しない。(黙って聴き、出された本人像・アイデアを記録する)	・積極的に発言しアイデアは徹底的に出し合う。 ・水平の立場で発言。他人の批判をしない(ただし、発言の根拠は求めてよい)。 ・自分の発言が少ないなと感じたら、思ったことを口にしてみるとよい。	・議論促進や(個人と環境のストレングスの3要素やストレングス整理表)に着目して深めるところを深めつつ、多角的に検討できるように視点の深化や変更、整理・まとめなどを行う。	・本人像の共有→アイデア出しへと進行 ・柔軟な・創造的なアイデアは大変良い ・まずは実現可能性や制度のことは考慮せず自由に発言。より具体的な方がよい(徐々に具体化させてゆく)
5 応答セッション(5分)	・出された本人像やアイデア、解釈や意見に対し、応答する。		・自分のなかで気づきがあったか?参加者にうながす。	
6 アイデアの選定(5分)	・アイデアから有益なものを3つ程度選ぶ(次回のGSVまでにアイデアの実行を含めて選ぶ)	他の人のよい着眼点やアイデアをさらに展開させたり、今まで提示されていない視点・ストレングスに転換してみることも効果的	・アイデアから有益なものを3つ程度選ぶ(SVが選ぶ場合も可)	終了後はスーパーバイザーと提供者で今後の具体的な動きを確認する

また、菊本は、カンザス州におけるケアプランには2種類あるとし、①福祉サービスは税金が使われている。その福祉サービスの根拠と効果を明確にするプラン(トリートメントプラン)と、②当事者が生活を変えようとしたり、自発的になにかを始めるようとするを共有し、想いに寄り添う応援プラン(パーソナルリカバリープラン)である。そして、「ストレングスモデルの取組で見えてきたこと(小澤温、一部菊本改変)」として、①相談支援専門員とクライアントとの(信頼)関係づくりがとても重要になる。②信頼関係は、ネガティブ視点ではなく、ストレングス視点で捉える。③障害特性は先入観と考える。事実(本人の発言・言葉の重み、非言語など)に着目し、主観を排除する記録と直視の練習が大事となる。④一人では真実(本当のニーズ)は見え

ない。必ずスーパービジョンが必要となる。独りよがりの問題性とチームアプローチの重要性を再認識。⑤人材の育成にはメンター（成熟した指導者）が必要である。メンターは上下関係ではない、メンバーの力を引き出す指導者（コーチ・トレーナー）が必要であるとした。¹²⁾

<グループスーパービジョン>

グループスーパービジョンは、毎月（【表 1】参照）1 相談支援事業所から 1 事例のストレングスアセスメント（SA）を提出してもらい、グループスーパービジョン（GSV）を行った。1 か月後にはその後の経過を報告した後、新たな事例でグループスーパービジョンを行うというスタイルをとった。

全部で 8 事業所・8 事例が提出され、それぞれグループスーパービジョンを行った。

<方法>

- (1)事前に、事務局にストレングスアセスメント票を提出。
- (2)事務局から、スーパーバイザーに提出
- (3)当日、ストレングスアセスメント票を配布
- (4)グループスーパービジョン開始【表 7】参照

- ①前回の GSV の事例提供者の報告
- ②報告セッション
- ③質問セッション
- ④アイデアセッション
- ⑤応答セッション
- ⑥アイデアの選定

- (5)ふりかえり（感想）

<形式>

・事例報告者とスーパーバイザーが並んで座る。参加者は、8～10 名のグループを 2 つ（アトラダム）形成。④アイデアセッションの時だけ、グループに分かれ（グループにファシリテーター 1 名を配置）、ブレインストーミングをする。アイデアセッション後、各グループから話し合われたアイデアを発表する。記録者（2 名）は、ホワイトボードに記録する。

<ふりかえり>

グループスーパービジョン研修を終えて、参加者にアンケートを実施した。その結果を以下に列記する。

1. スtrenグスアセスメント（SA）をしてみたの感想

参加者は、ストレングスアセスメントをしてみて、以下のような感想を述べている。

① 機会

「今まで本人を分かっているようで分かっていた。改めて本人を理解し、本人との関係を構築する意味でも良い機会となった」とストレングスアセスメントを「改めて利用者を見直す機会」ととらえている。

② 気づき

「アセスメント票を書くにあたり、学校の先生の発言やかかわりを振り返ってみると、先生が本人の良いところを見つけようとし、伸ばそうとしていることに気付いた」「ストレングスアセスメント票に記入する際、最初は慣れていない部分から戸惑いがあり、なかなか強みが出てこなかった（課題や問題は沢山思いつくが…）。自分自身の見方や考え方を少し変えることで、ちょっとしたことや普段当たり前に思っていたことも、本人にとっては強みであるということに気付かされた」と視点の変化に伴い、利用者およびその人にかかわっている人の見方も変化したことに気づいたと述べている。「本人の強みに目を向けることの大切さを改めて実感させられた。今までは悪いところばかりに目が向けられていたと反省」「ストレングス視点でアセスメントしてみると、今までの見方とは違い良いところが強調され、人物像が変わりました。これまで、自分の価値観でこうあるべき、こうすべきと本人に伝えてきたことを反省しています。困ったケースほど、ストレングス視点が大事だと思いました。本人主体で進むべきところも見えてきたように思います」。これまで自分がイメージしていた利用者の人物像が変わり、自分の見方を反省している。

③ 変化

「どうしても本人の出来ない部分や問題行動等、マイナスの部分ばかりに目が向いていたが、ストレングスアセスメントを通して、本人のプラスの部分に目が向けられるようになった」「日頃から、診断的なアセスメントではなく、プラスの方向に支援を検討するようになった」「日々の支援の中では、「これができないな～」の視点に陥りがちですが、事例提供のためにストレングスアセスメントを体験することで、日々の支援にもストレングス視点に立ち戻ることができるような気がした」「日々の支援の中でも、「これができるよね」と出来ることを見つけ、そこを伸ばしていくというスタンスでかかわっている」「本人の良さ・強みに焦点を当ててアセスメントを行うことで、自分に自信をもち前向きな気持ちで話し合うことができた」と自分自身の視点や支援自体が変化したことを認識している。

④ 理解

「今まで数々の困難を乗り越えてきて、最近少しずつ自己肯定感をもつことができるようになった今の時期、本人の考えるこれからの生活についての話をじっくりと聞いたことで、本人の描いていた生活が具体化され希望も大きくなった。同時に問題点も明確になった」「ただ、本人には不安も多いことが分かり、それに対して今後一緒に向き合っていかなければならないことも浮き彫りになった」「本人の希望と願望が鮮明になり、本人の理解が深まった。それに対しての、本人・環境のストレングスを考えることで、本人の置かれている状況がより分かりやすくなった」。ストレングスアセスメントをすることにより、その人の生活状況や課題が明確になったり、本人の希望することも改めて知ることができたとしている

また、「初めに、テキストを使って講義をしていただいたので、理論的に押さえるべきポイントを教えてもらうことができ、実践に生かすことができたと思う」として、ストレングスモデルを実施する際に、理論を学ぶことの大切さを指摘している。

⑤ 難しさ

「否定的な発言が多い子であることもあり、本人の発言や行動の裏に隠れている本当の気持ちや希望を見つけることがとても難しかった」「普段、良いところを見つけようと心がけ

ているつもりだが、アセスメント票を書くことがとても難しく、見方が全然足りないと感じた」。これまでのアセスメントの仕方と異なることから、ストレングスアセスメントに取り組んだ当初に多くの戸惑いを感じた参加者は多い。「日々の実践でも、パーソナルリカバリープランを意識して支援していくと、具体的に目標達成できるのでいいのだが、なかなか実践できない日々です」と次のパーソナルリカバリープランに取り組もうとしている参加者もいる。

2. グループスーパービジョン (GSV) をしてみたの感想

参加者は、グループスーパービジョン (GSV) をしてみて、以下のような感想を述べている。

① 機会

「GSVを通して、参加者一人ひとりが明るく、活発に意見を出し合っていた」「本人の強みに着目することで前向きな意見が多く出され、その延長で本人の視点で地域にない資源や取り組みを生み出そうとする活発な意見交換がなされたのが良かった」と、GSVの様子を捉えている。

「様々な分野の方が参加されれば、またいろいろな意見が出てくるのだろうと思います。スーパーバイザーがいることで意見の出しやすい雰囲気作りも今年度はできてきたように感じています」「自分の考えつかないアイデアを多く得ることができ、大変勉強になった。また、それぞれが所属する事業所についての理解も深めることができ、今後サービスや社会資源を利用するにあたり、知識を増やすことができ大変良かった」「実際の事例検討のグループに入らせてもらうことで、普段の仕事ではわからない部分に触れることができ新鮮で楽しい時間でした」「グループで話すことで、色々な意見や自分が思っていた利用者の印象が聞けたりして勉強になった」他の事業所の人との意見交換で新鮮な経験として GSV を捉えている。

「本人の強みに着目し、自由に、そして無責任に発言、検討出来るところが良かった」「他の症例検討なら、自分のようなまだ経験の浅い者が発表すると、ともすれば指導的な意見が多く出るかもしれないと思うが、そのようなことは全くなく、対等に多くの意見をいただく中で、上記のような気づきができて、とても勉強になった」「以前の野中式の事例検討会では、ワーカーとしてのアセスメント力について批判されるかもしれないという緊張感がありました。しかし、ストレングスモデルの事例検討会では、ワーカーに対して批判的な意見が向けられるのではなく、情報が不十分な点についてはワーカーが取り組むべき「今後の課題」として整理されていくことを体験できました」。「実際の支援チームにおいても、否定的であったり固定的であったりすることなく、利用者の目標の支援に向けて前向きに議論していくことが大切なのだと感じました」これまで経験してきた事例検討は、指導されるあるいは批判されるのではないかという緊張感から、意見を述べるのを控えたりしている傾向があったようである。GSVではその心配がなく、むしろ不備な点は、今後確認していくところというふうに捉えることができる。GSVの基本ルールをきちんと押さえて参加することで支援者自身が前向きに取り組むことができる。

② 気づき

「皆さんに意見をいただくには、自分が考えていたゴールは曖昧であったことに、始まって実際にしゃべりながら気づいた」SA作成の段階から、GSVで実際に事例を紹介する段階で気づくことのできる貴重な体験である。「自分の職場にはスーパーバイザーとなる人がいない」。日々の孤軍奮闘ぶりがうかがえる。

③ 参考

「自分では思いつかなかったことを皆さんから教えてもらったり、凝り固まった考え方を違う視点から見ることで良かった」「参加者間で本人像を思い浮かべながら、今後の支援の可能性について話し合いができたことがよかったと思う。自分では思いつかないようなアイデアが聞けて良かったです」「個人でアイデアを出したり広げたりすることには限界があるが、グループでアイデアを出し合うことで一つのアイデアが深まったり枝分かれして広がったり、様々な見方があることに気付いたりして、より効果的なものが出てくることを体感できました」。自分一人では思いつかないアイデアや知らない情報など、GSVを通して得られたアイデア・情報は、貴重である。

「他の事例についての勉強会でも、今自分が担当している方への対処の仕方や問題解決の参考として大変有意義なものとなった」「本人の望むことを叶えてあげるために、アセスメントを深めていくとその人像が見えてくる。みんなでアイデアを出し合うと話がだんだん膨らんでいく。それぞれの方の経験から見方、考え方を知ることができる」「複数人で考えることで様々な角度からの見方が可能になり、利用者へ提案できることの幅が広がる良いことだと感じました」GSVで話し合われた意見が他の利用者の支援の参考になるという点はGSVの利点である。

「一人で悩むのではなく、様々な方の見解も踏まえて「今後の課題」が明確になるため、GSVを通じてワーカーも背中を押してもらえるのではないかと感じました」支援者が自分のすることを肯定・支持されるという経験はGSVの大きな特徴である。

④ 変化

「バックグラウンドの異なるさまざまなメンバーから実践的な意見を聞いたり、また自分自身も積極的に質問や意見を出したりすることで、自分の中に新たな発想の引き出しが増えてきているような気がします」「多面的な見方から意見を出していただくことで、気付かなかった方法や知らなかった法律などについて教えていただき、今後の進み方が具体的に見えてきた」「小グループで行うことにより、安心して発言出来る雰囲気確保されていた。参加者それぞれの意見を聞くことが出来き、自分の気づかないアイデア出しにより、選択肢の幅が広がった。また、関わりの視点の変化も得られた」GSVを経験することにより、その学習効果は大きく、参加者自身の見方・考え方・支援方法が変化する。

⑤ 理解

「本人の生活が豊かになり、より良い方向に進んでいくようにしながらも、支援者自身が前向きに明るく、本人と関わっていくことが重要であると思った」「会議等で出席できず1回のみ参加でしたが、事例についてグループで話しあいアイデアを出し合うことで色々な視点があることがわかりました」「事例を通して実際の支援を考える中で、他のケースに共通することや地域全体で取り組むべきことなどを考えることが出来た」「地域全体のアセス

メント力が上がった気がする」GSV をすることによって、事例に対する理解が深まるとともに、地域資源についての理解が深まったようである。

⑥ 難しさ

「FTをさせてもらいますが、頭が固く、うまく意見を引き出せていないので残念だなあと思っています」「グループスーパービジョンのプロセスを、参加者がしっかりと理解していないと、しっかりとした話し合いもできないし、結論が出ないと思う」

3. ストレングスモデルを通して（感想）

参加者は、ストレングスモデル講座受講後、この1年間を通しての感想を以下のように述べている。

① 機会

「本人のストレングスを考えることで、本人の持つエピソードを多く知ることができ、本人の理解が深まった。本人も、自分の希望・願望を考えることで、自分の人生や生活を見つめ直すきっかけができ前向きな気持ちを持つことができると感じた」「ストレングスモデル講座は、利用者との信頼関係をつくりながらリカバリーのプロセスに関わっている、ということ、改めて自分自身に問い直す機会になりました。同じ目的に向かって計画を共有し、ともに楽しんで進めていく（先生の言葉では「旅行をする」）ことを意識したいと思います」ストレングスモデルは、利用者のリカバリーに寄り添うだけでなく、支援する側の人生をも見直す機会となる。結果として、支援者自身もエンパワーされることになる。Reciprocal（相互に利益を得ること）な関係である。

② 気づき

「ふだん私が行っている支援について、障がいや、目に見えているニーズを解決することに大きなウエイトを置いてしまい、クライアント自身の生活や人生の目標にあまり焦点を当てて考えてこなかったことに気づきました」「利用者さんのストレングスに目を向けることの大切さは知っていながらも、普段の支援の中ではついつい課題ばかりを挙げていたことに気づかされました。今年度のGSVを通して本人さんの良いところや可能性を伸ばして支援につなげていくことを考えるほうが、支援者の気持ちも上向きになるような感じがしました」ストレングス視点とストレングスモデルはことなる。実際にストレングスに着目して活動して見ることが大切であることと、本人の望むゴールを考えるだけでも、これまでの支援の仕方とは異なった手応えを感じることができる。

③ 変化

「いろいろな相談の場面で、「この方のゴールはどこだろう？」と想像し、尋ね、「そのゴールに向けた本人の活動や必要な支援を一緒に考えて行こう」というスタンスで接することを心がけるようになったのは、自分の中の大きな変化であると感じています」「日常の支援から、本人の意思を大切にするようになった。「～すべき」という概念は置いておいて、いかに本人の意思に沿える道はないか考えるようになった」

④ 理解

「自分の物差しで物事を判断してはいけない」「こうあるべきだ」という理想を相談支援

専門員が決めてはいけない」「自分の生活を切り開いていこうとする前向きな今の気持ちを支えるものは、本人のもっている良き個性や能力、環境が基盤となりそれらを生かしていくことが大切であるということが分かった。」「GSV を試みて、当事者の方はたくさんの強みを持っていることがわかった。実際の仕事を通して、その強みをたくさん見つけられるようにしていきたいと思った」「支援していく中で、本人中心の支援、本人のストレングスに焦点を当てることの必要性、大事さを継続的に学ぶことで定着していったように思う」「利用者のアセスメントと同様に、地域にある資源のアセスメントの重要性を感じました。利用者や社会資源に変わることを求めるのではなく、「完璧な生活の場」を見つけていくという視点を大切にしたいです。また困難な状況に目が向きがちになるので、「新しい生き方の再発見」という見方を身に付けていきたいと思います」

ストレングスモデルの要点をよく理解されての感想である。

⑤ 難しさ

「初回の講習を受けてから、長期目標などは支援者が立てるものではなく、本人が立てるものだ、ということ肝に銘じているつもりだが、なかなか難しい。特に子どもは難しい」「事例の出した人のケースですが、ストレングスモデルの GSV でアイデアを頂き進めていくと、受け入れ側の難しい現状は変わらず、なかなか結果が出ない状況があります。資源づくりも含めて、これからの課題はいっぱいあるなと感じています。たくさんの人のアセスメントをしていってみたいなと思いついてはできません」「日々の実践でも、パーソナルリカバリープランを意識して支援や記録していくと、具体的に目標達成できるのでいいのだが、なかなか実践できない日々です」

⑥ 行政

「実際の業務では利用者のことを考えるという行為までは到っていなかったが、実際に相談支援の方々には混じり考えることができ、相談支援専門員の方々の大変さ責任の重さが少し感じられたことが良かった」「1回だけの参加になってしまったので、もう少し色んな事例検討に参加してみたいと思いました。障害のある方本人の強みに目を向けるストレングス視点は、今回の勉強会だけでなく、これから障害の方とかかわっていく中で常に外さないようにしていきたいと思います」この度の研修では、必ず行政の人が参加しておられた。自立支援協議会の相談部会に行政の方が積極的に参加しておられる地区ということもあるが、利用者と近い行政であることが言える。

⑦ その他

「年間を通して、ストレングスモデルに取り組むことが出来て良かったと思う。今年1年間は、ストレングスモデルの基礎を理解しながらも、実際に事例を提供したり、検討したりという形であったが、2年、3年と経験を重ねていくことで、更に実際の支援の中で有効に活かしていくことが出来るのではないかなと思う。またその後の経過報告はしているが、更にその数ヶ月後はどうか、またはもっと短いスパンで経過を追っていくことが必要ではないかなと思う」と、さらに続けて経過を見たいと意欲的に取り組もうとしている。

V. まとめ

この度、ストレングスモデルにおけるグループスーパービジョンをその圏域の中核となる自立支援協議会の相談部会において試行的に行うことができた。研修としてのグループスーパービジョンであったが、参加者はストレングスアセスメントに取り組み、グループスーパービジョンを通して、視点の変化、新たな発見、気づき、支援の変化等々、多くの経験をした。これまで試行錯誤を繰り返してきた支援が、新たな支援のかたちが変わっていくことを示唆するものである。それは、相談支援がサービス等利用計画を立てることが最終目的なのではなく、本来の基本相談部分を行うことがソーシャルワークだからである。

猪飼周平は、「個人の人生・生活の目的は分からない」「個人の人生・生活は個別的で複雑である」この2つの事実を、正面から受け止めた上で何が出来るかを考えていく、その支援のアプローチが「生活モデル」であるとしている。¹³⁾「生活モデル」を「ストレングスモデル」と置き換えても、その2つは事実である。確かに一人ひとりの人生・生活の目的はわからない。ただその人が、新しい生き方の再発見をしようとしたとき、何か希望を持つ。そしてゴールを定めそれに向かっていくプロセス（過程）に我々が関わるのである。その人の人生・生活は個別的で複雑である。その中でストレングスに着目して活動していく。生活に目的がないということを正面から捉えた上で、どう支援すればいいかを考えたときに出てくる一つのアプローチが、エンパワメントやストレングスである。生活課題を抱え込みながらも生きていけるように、自分の力で複雑さや困難さに立ち向かえるように支える。であるから非問題解決的、寄り添いの、伴走的となる。その具体的なアプローチがストレングスモデルである。当事者がさまざまな社会的な関係性の中で、その問題と向き合いながら生きていくとき、傍らにいたのである。

障害福祉サービスは、猪飼の言葉を借りれば「社会保障モデル」である。障害福祉サービスだけで生活が支えられるわけではない。「個人の人生・生活の目的は分からない」「個人の人生・生活は個別的で複雑である」この2つの事実を前提とするならば、生活モデル的アプローチとなる。具体的なアプローチの仕方としてストレングスモデルが有効であると考えられる。今後、同様の研修を重ねるとともに実践場面でグループスーパービジョンを行い検証していくことで、相談支援の質の向上を図ることが望まれる。

引用・参考文献

- 1) 監修 小澤温、編集 埼玉県相談支援専門員協会「相談支援専門員のためのストレングスモデルに基づく障害者ケアマネジメントマニュアル」中央法規 2015
- 2) 前掲書 5)p.27
- 3) 前掲書 5)p.52-54
- 4) 前掲書 5)p.64
- 5) 前掲書 5)p.30
- 6) 前掲書 5)p.70
- 7) 前掲書 5)p.33-34
- 8) 前掲書 5)p.120-121

- 9) 前掲書 5)p.35
- 10) 前掲書 5)p.132-134
- 11) 前掲書 5)p.158-159
- 12) 「ストレングスモデルに基づいたケアマネジメントの実践」(2015.11.21 富山国際大学) 資料
- 13) 編集 東尾愛子「今あらためて生活モデルとは？」猪飼周平 基調講演今あらためて生活モデルとは？～これからの支援文化を作り上げるために～ 30年後の医療の姿を考える会 2017